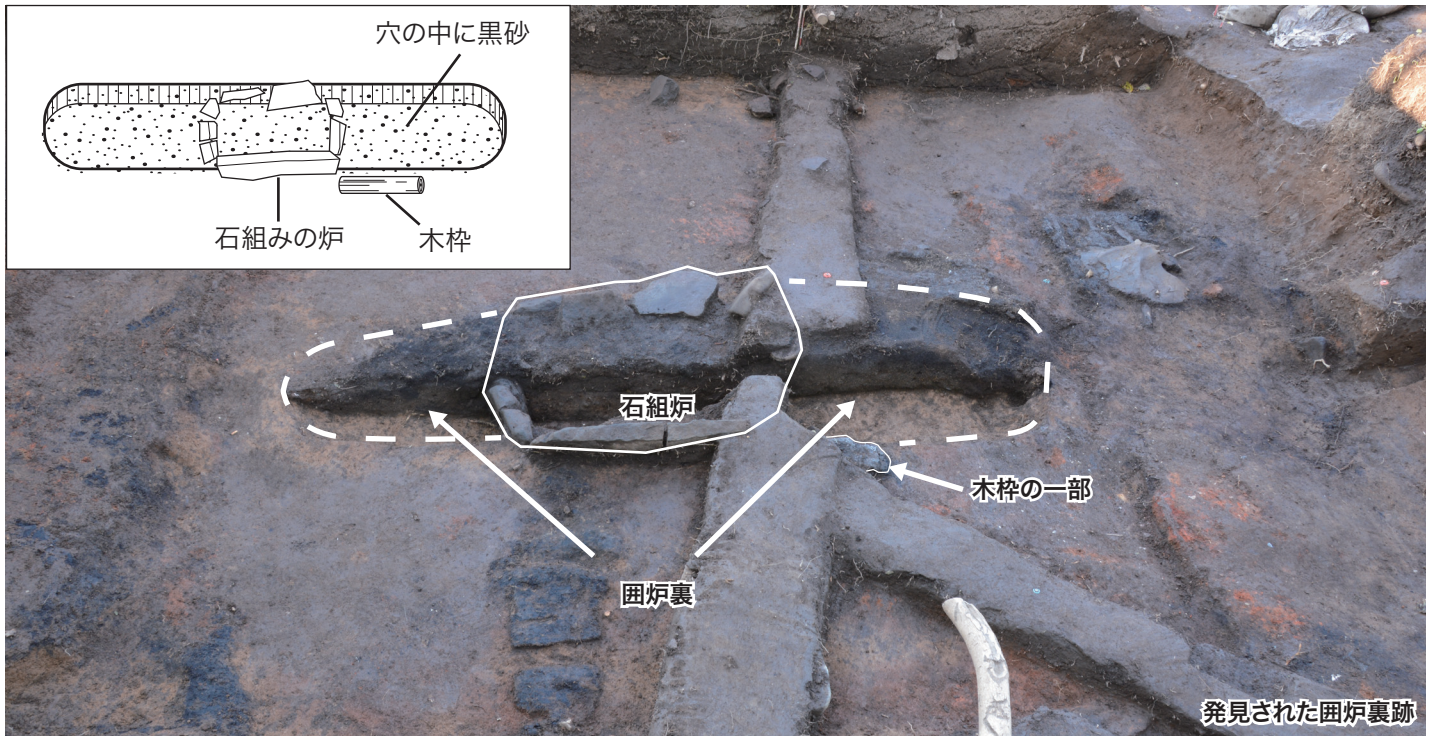
約1,000年前の囲炉裏（いろり）？



発見された囲炉裏跡

6月3日のウトロの最低気温は-0.5℃。夏の気配どころか、ストーブや暖房のスイッチを入れた家庭も少なくないでしょう。きっと、ウトロに暮らした古代人も肌寒い初夏には家族で暖をとったに違いありません。

黒砂で満たされた謎の穴

昨年、ウトロのチャシコツ岬上遺跡（通称：カメ岩）の調査の際に、竪穴住居跡の中央部から立派な石で組んだ炉跡が見つかりました（写真中央）。約1,000年前にこの家で暮らしたオホーツク人は石組炉で暖をとり、煮炊きをして冷えた身体を暖めていたのでしょう。

では、その石組炉の両側に広がっている黒い部分は何でしょうか（写真の破線部）。調査のために長軸方向に半分掘ってみると、床を掘り抜いた穴にびっしりと黒砂が敷きつめられていました。黒砂を顕微鏡で観察すると地元の玄武岩がもとになっていることがわかりました。おそらく、河口付近の海岸からわざわざ運んできたのでしょう。

さらに、その黒砂中からは焼けた動物の骨が多く見つかりました。これらより、黒い部分の正体は古代の囲炉裏と考えられます。

石組炉で煮炊きした土器を両サイドの囲炉裏に移し、皆で取り分けたのでしょうか？それとも食べた後の残飯（骨など）を捨てる場所だったのかもしれません。

まるで日本家屋

日本家屋でよく目にする囲炉裏は正方形に組んだ木枠内を灰で満たし、その中央で火を焚くイメージがあります。実はチャシコツ岬上遺跡で見つかった囲炉裏も一部木枠で囲われていました。火災などで焼失した家屋は、建築材などが炭となって残ります。そのため、囲炉裏の周りを囲っていた木材の一部が残されており、建築当時の状況を復元することができます。

それにしても、家の中央に木枠の囲炉裏があるなんて、伝統的な日本家屋のようです。

地域ごとにアレンジ

調べてみると、囲炉裏を作るオホーツク文化集団は主に礼文島・知床半島北西岸・根室半島の3地域に偏る傾向があることがわかりました。間の地域がすっぽりと抜け、飛び地的に分布する点はなんとも不思議です。また、地域によっても少し作り方をアレンジしていることがわかりました。礼文島では中央部でなく、囲炉裏の両端に石を置いています。また、黒砂だけでなく、白砂や灰で満たすタイプも見つかっています。

時期ごとに見ると、礼文島の住居が最も古く、知床半島北西岸・根室半島は新しい時期のものでした。つまり、このスタイルを持った集団が礼文島から他の2地域に拡散したと考えられます。礼文島から知床半島、根室半島への大航海です。このように、オホーツク海をダイナミックに移動したオホーツク人の足取りを囲炉裏という施設からも窺い知ることができます。

（平河内毅）

発行　知床博物館協力会 2016.6.23
099-4113 北海道斜里郡斜里町本町49
斜里町立知床博物館内
TEL: 0152-23-1256　FAX: 0152-23-1257
http://shiretoko-ms.sakura.ne.jp/